現代美術における「制作」と「発表」との関係について
～福島現代美術ビエンナーレ2006に参加した美術家のアンケートを中心に～

福島大学助教授　渡邊晃一
福島市立大鳥中学校　廣川　豪

【キーワード】現代美術，絵画，制作学

はじめに（本研究の背景と目的）

「少なくとも，現代の日本には国際的に立派に通用するすぐれた美術家が少なからずいて，それぞれに特徴のある現代の美術作品を制作している。それは応接間やデパートの美術品売場に陳列される類とは違う場で一般化しつつある。」（本郷新）

日本において「美術」は現在，生涯学習をはじめ一般市民に広く浸透している「美術」，教育現場で扱われる「美術」と，美術家によって実践される「美術」が各々一致しているとは言い難い状況にある。それは「豊かさにつながっているのではなく，それぞれの交流がないまま，独立した領域を保って存在している」[註1]例えば「美術」を一般の人々は，絵画，彫刻など，厳格なジャンル区分を持ち，価値基準の明確な「作品（もの）」として捉えている場合が多い。地方に密着した「文化展」の活動もまた，「作品」の大きさや表現素材も一定基準の範囲内で制作されており，「発表」の形式も，ギャラリー，美術館という展示空間が考えられ，画一化されている。

しかし美術は今日，作家の制作の動機や伝えたいメッセージとの関わりによって，様々な「発表」がある。とりわけ現代美術は，作品を単独の「もの」として見るのではなく，制作のコンセプトや，インスタレーションなど，出来上がった作品をいかに見せるかという問題を，制作と一続きの流れとして捉えることを重視している。

これまで学校教育や生涯学習の場で扱われる「美術」は，作品を制作する際の材料の扱い方，技術的な問題と比較して，「発表」にあまり意識が置かれてこなかった実情があげられよう[註2]。日本の地方では未だ「現代美術」に触れられる場も少ない。美術を難解で自分の生活には関係ないという意識を持っている者も多い。

本研究は美術の「制作」と「発表」との関係を問い直したものである。「福島現代美術ビエンナーレ」の活動を紹介すると同時に本展で発表された美術家を中心に実施されたアンケートを通じて，各々が「発表」についてどのように向き合っているかを明らかにした。作品が作られるに至った動機や「発表」に対する考え方は，鑑賞者にはなかなか見えづらい部分である。制作者がなぜそのような発表形式や表現媒体を選んだのか，それらを深く知ることで，制作者の作品を一層理解できるであろう。結果，本研究は，生涯学習の場や学校教育，一般の人々が考える「美術」を繋げていく上での指針となるものである。

Ⅰ，福島現代美術ビエンナーレ2006の「発表」について

2006年，「福島現代美術ビエンナーレ」展が開催された[註3]。「福島現代美術ビエンナーレ」は2004年，福島大学の絵画研究室が発起し，学生，院生が中心になって企画運営するグループ展として始動したものである。本年度の実施体制は，福島県文化振興事業団が参画し，運営体制が拡充された。福島大学関係者のみならず，県内の美術館の学芸員，他大学の教員，この活動の趣旨に賛同するアーティスト，さらには一般市民が実行委員として組織された。またボランティアを募り，運営面のサポートを委託した。

このような「福島現代美術ビエンナーレ」展の目的は以下の三つがあげられる。

まず，地域からの「文化発信」を目的としている。地域の中心にある大学という機関を基点として，美術をもっと一般に開かれたものにする想いが今回の展覧会には込められている。地域社会にアートが息づき，また地方からアートを発信するための課題や可能性を考えていく。その上で，活動はギャラリーなどでの

展示発表にとどまらず，シンポジウムや講演会，ワークショップも開催され，様々な角度から美術と一般の人々が繋がる契機となった。

二つ目は，「若手の積極的な活動」が挙げられる。これまで若手が参加する美術展は，仲間内での小規模なグループ展や，すでに出来上がった「公募展，コンクール」に外から参加することが多い。出品者は作品づくりに集中すればよい一方で，「発表の場」そのものを作る意識は薄い。美術関係者のみならず，広く地域との関わりの中で開催される展覧会に，学生が企画段階から参加し，また，運営に携わることは，様々な重要な意味を含んでいるであろう。ビエンナーレという名前の通り，二年に一度開催される本展は，まさに地域における一つの文化活動の礎を築く活動となる。それを学生自らが生活する地域，「場」との関係の中で実現させていくことは，今後，地域の活性化においても様々な展望を含み持っている。

三つ目に「人と人との出会いの場」として機能される。「福島現代美術ビエンナーレ」の出品者は，福島大学の在校生，卒業生のみならず，国際的に活躍する美術家や，海外の作家なども加わっており，多種多様な人々によって組織されている。展覧会を鑑賞し，ワークショップに参加する人々もまた，普段顔を合わせることのない者たちである。そこから本展覧会は，単に作品発表の場だけでなく，様々な人々と交流が得られる機会としての意義がある。

「福島現代美術ビエンナーレ」は，一般市民が参加するアートプロジェクトとして，生涯学習や社会活動への参加欲求を満たし，人と人とのつながりを強め，地域の活性化につなげる効果が期待できる。「美術」作品を制作することの喜びのみならず，見ること，考えることの楽しさを体験することによって，豊かな精神生活を作りだす効果もあろう。また「現代美術」を通して，多様な価値観について相互の認識を促すことができる。さらには，地域社会を見つめ，お互いを理解する上で「アート」が非常に重要な役割を果たすものとなろう。市民の自主的な創造活動を活発化させ，活気のある地域づくりを捉えていく上でも大きな役割を担っている。今後は賛同者たちと組織して，県内全域をネットワークし，芸術のあふれる街を理想とした，都市政策への提言を行う活動に発展させていきたい。

なお今年度開催された「福島現代美術ビエンナーレ2006」の具体的な活動は，以下の三つの柱によって成り立っている。

1，福島に関連した「空」をテーマに

本年度のテーマは，高村光太郎作「千恵子抄」にある「ほんとの空」より

2，若手作家と現代美術の紹介

大学の学生，院生と一緒に他国籍の若手作家（ポーランド，ドイツ，イギリス，メキシコ，アメリカ，カナダ，バングラデシュ，中国，モンゴル，台湾，韓国など）による多様な現代美術作品（平面，立体，インスタレーション，パフォーマンス，アニメーション，映像作品など）を紹介

3，地域の方々との「美術」による交流

アートのある街づくりとワークショップによる作品交流

今年度，参加した美術家は，福島大学関係者のみならず，県内外の若手アーティストをはじめ，靉嘔，川口起美雄，吉江庄蔵をはじめとした国際的なアーティストや，海外から40名以上のアーティストが出展した。期間中は福島県文化センターでの展覧会をメイン会場に，他にも多数の関連イベントが繰り広げられた。福島市街で開催された「Artown アートタウン」，「パフォーマンス」によるダンスや詩の朗読会，さらには公開制作と「ワークショップ」や海外作家の「講演会」「シンポジウム」などが企画された。

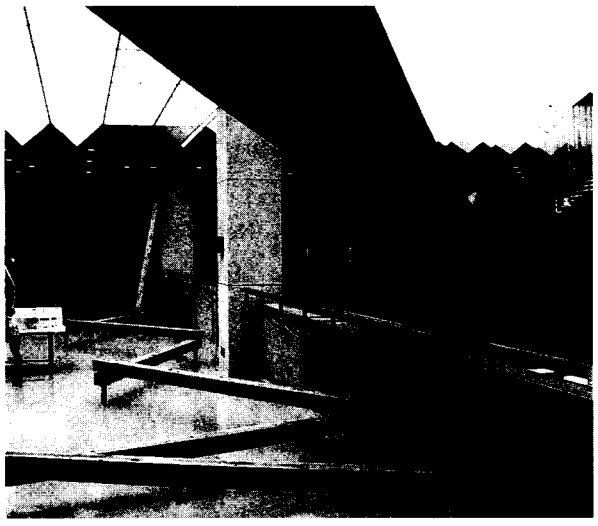

図１　靆嘔（和紙で制作された15mの虹）

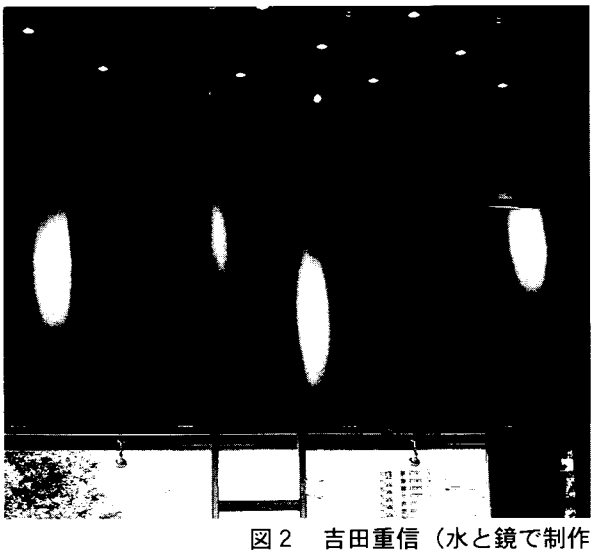

図２　吉田重信（水と鏡で制作された実際の虹によるインスタレーション）

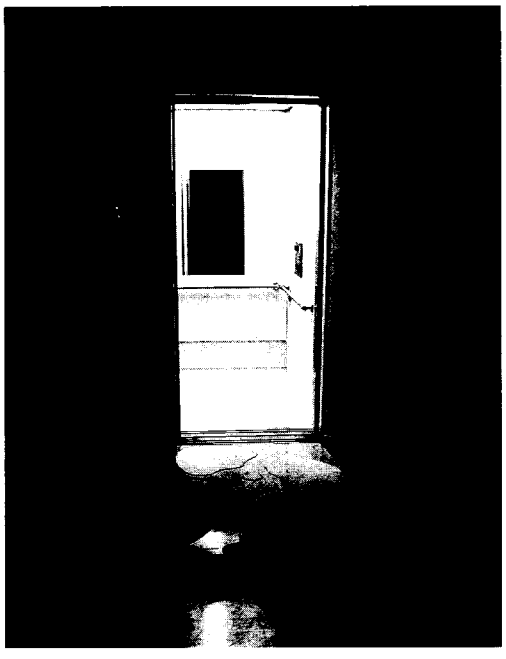

図３　Air Plug（エレベーターに設置された光と匂いの空間）

図４　渡邊晃一（ショーウィンドーに設置されたユリの花によるインスタレーション）

図５　吉江庄蔵（地下空間に宙吊りにされた皮膜彫刻）

図１～５　「空（Sky, Air, Heaven, Ku, Firmament）」をテーマに開催された本展では，様々な「発表」の形態を見ることができた。

Ⅱ，現代における「発表」の現状

１，制作者の発表に対する意識
—アンケートの結果から—

現在日本で活躍している美術家は，「発表」に対して一体どのような意識を持っているのか。本章では「福島現代美術ビエンナーレ」に参加アーティストを中心に実施されたアンケートの回答を紹介し，制作や発表に対する考え方を提示してきたい[註4]。結果，現代における多様な発表の方法と，制作と発表とのかかわりについて具体的に捉えることができよう。

アンケートの質問内容

問１．あなたにとって，理想の発表方法とはどのようなものですか？
以下から３つ選び，順に番号で示して下さい。
（　）→（　）→（　）
A．個展　B．グループ展　C．公募展
D．コンクール　E．美術館等の企画展
F．その他

問２．これまであなたが発表した作品の中で，代表的な展覧会をお教え下さい。（展示の方法など具体的に）

問３．あなたが作品を発表する際，主にどのような表現媒体（例：油彩画，ＣＧ，インスタレーションなど）を使用しますか？　主にその表現媒体を選んだ理由なども具体的に教えて下さい。

問４．作品を発表する際，あなたが特に鑑賞してもらいたいのはどのような人々ですか？
（例：年齢層，美術関係者など）

問５．あなたが今までに見た展覧会で特に印象に残っているものはありますか？　具体的にそれはどのようなものでしたか？

問６．あなたが作品を発表する上で，具体的な目的があればお教え下さい

靆　嘔

１．その他…作品（その時々の）によってそれが一番良いと思われる方法の場所，野外でも屋外でも。
２．エッフェル塔イヴェント（Paris）
Black Hole（N. Y ＆リトアニヤ）
ワールドトレードセンター（New York）
50年代のアンデパンダン展（読売，日本美術会）
３．想像されたし
４．地球上すべての人々
５．ジョン・ケージ　＜３分44秒＞
６．日々の生き方が具体的な目的。

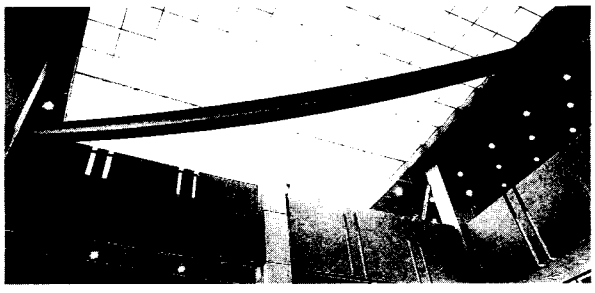

図６　靆　嘔

相笠　昌義

１．個展→美術館等の企画展→コンクール
２．日本秀作展，安井賞展，国際青年美術家展，池田二十世紀美術館個展，美術館企画展，マドリッド個展，他。特にどれと言えません。
３．　油彩。メカニズムに肉眼の目が負けないため。
４．普通の人々。
５．伊藤若沖展
６．現代日本を感じさせる，今を表現すること。

青木　野枝

１．美術館等の企画展（の個展）→個展→グループ展
公募展とコンクールは今のところありえません。
２．2000年の目黒区美術館や2003年国際芸術センター青森のようにおよそすべての展覧会のスペース，空間に自分が何をつくりたいのか考えてつくる。素材の鉄はパーツでもっていき美術館内で溶接，組み立て。会期後は解体します。
３．彫刻。私の作品はインスタレーションともいえるかもしれないけれど，空気もすべて含んだ彫刻と思っています。彫刻という少し古めかしい言葉が好きだから。
４．今まで「美術」なんて関係ないと思っていたような人が，私の作品を見てくれて，「美術」とか言葉やジャンルではなくて何か感じてくれたり，どこか変化していく

きっかけとなれば嬉しい。

5．展覧会ではないけれどNYの自然史博物館でイヌイットやさまざまな民族や時代のものを見たこと。この世界にはたくさんのもの，考え方，価値観，があるのだと感じたから。

6．4と同じ。

荒井　経（学芸大学）

1．個展→美術館等の企画展→その他…オーブンスタジオ

2．個展　このところはギャラリーの企画展が多いけれど，学生時代に大学内でやった初めての個展が自分にとっては大切に思っています。

3．紙（和紙），膠，顔料，等

日本画を出発点にしている関係で。日本画には顕在する呪縛があり，ややこしいのですが，近年はその呪縛自体もテーマにしているので。

4．まずは，自分の敬愛する人々です。次の次元では結果論になりますが，見てよかったと思ってくれる人々です。

5．近いところでは，先日終了した展覧会

芸大美術館，都現代美術館，セゾン美術館3者共催の日本近代美術展。

特にカタログに寄せられたテキストがよかった。（真剣さが）

6．作品は生きている以上，自分の精神活動の足跡として。形に残ることが魅力。→それらは常に発表し続けることを前提としています。また，作家として，見せるもの，見るものとして作品は作っております。（制作時から半分は鑑賞者のものとして）

図7　荒井　経

新井　知生（島根大学）

1．個展→美術館等の企画展→グループ展

2．現代日本美術展・安井賞展・エンバ美術賞展などのコンクール，個展9回，公募展。

絵画制作の仲間と開いたグループ展多数（制作・発表の機会を増やすため，いろいろな形の展覧会に参加した）

3．アクリル・パネル——絵画・平面の形式にこだわっているため。

当時(80年代)新しい描画素材であったアクリルを使った。（油彩の伝統的な重みがイヤだった。）

4．1．美術関係者　2．一般人

5．「形象のはざまに」展（1992，東京国立近代美術館）

「視ることのアレゴリー」展（1995，セゾン美術館）

「絵画・唯一なるもの」展（1995，東京国立近代美術館）

（現代の絵画の可能性に焦点をあてた企画だったから）

6．絵画によって自分の世界観・宇宙像を他の人に問うているので，それをトータルにだすには，個展が最適だと考えている。

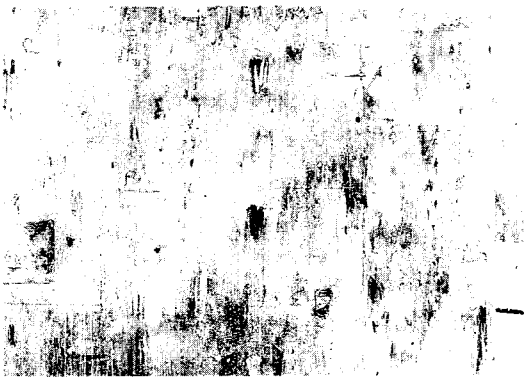

図8　新井　知生

加藤　修（千葉大学）

1．美術館等の企画展→個展→その他

その他…ワークショップ中で発表

2．安田火災美術財団奨励賞展（現，損保ジャパン美術財団奨励賞展），安井賞展，個展（銀座ギャラリーQ），個展（セイラムギャラリー　N.Y）etc

3．油彩：使い慣れているので，主に使っているが，ペンキその他の接着剤または素材そのものの色を利用する事が多い。

4．美術関係者（？）…マスコミに取材してもらう利点は，より多くの人に「考え」が伝わる目的であるので，最終的に期待する鑑賞の対象は一般の市民のように思う。当然年齢層はすべて。

5．さまざまな作家によるBOXの意識を集めた展覧会が水戸芸術館で15年ほど前に開催された。館自体がはっきりとしたコンセプトをもって活動していたので，失望することのない展覧会が続いた。ここ7年ほどは質に問題有。

6．人をどれだけ愛せるか，また自分自身にどれだけ「気づき」があるかを試されているように感じる。

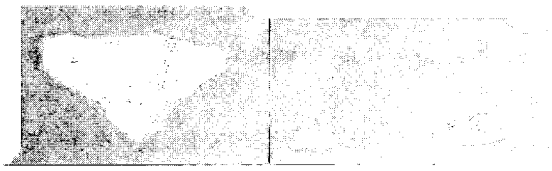

図９　加藤　修

川邉　耕一

1．個展→美術館等の企画展→グループ展

2．2003年６月９日～６月27日　ペンシルヴァニア大学内ギャラリーで行った個展。

展示スペースが壁の関係で広いスペースと狭いスペースとに分かれていたため，広いスペースには大作を，狭いスペースにはドローイング，版画を展示した。初のアクリル画と版画による発表でした。

3．主にアクリル画と油絵具との併用。表現上水性であるアクリル画と油性である油絵具の質の違いを利用しているため。

（参考までに）学生時代からの表現媒体の変遷を記します。

油彩→練り込みテンペラ（その他のテンペラ画）→油彩＋蜜蝋→油彩＋アクリル

4．特にはいないが，あえて言うと若い人々。

5．アンゼルム＝キーファー展（1993年？（京都）と2003年（ニューヨーク））

キーファーの大作群，2003年は平面と立体作品。新しい挑戦を感じられたから。

特に1993年作品「リリト」は圧巻でした。

マーク＝ロスコ展（1989年スイスのバーゼル）

ロスコの作品を一同に見ることができた。画面が前後，左右静かに動き，観者を飽きさせない。

6．作品作りはいわば自分自身への挑戦であると考えます。日常の生活の中から何をどのようにくみ上げて作品としていくか。こういう平凡な日常でどう問題提起をし，それを表現に結びつけていくことができるか。

また作品制作を通して今の自分の殻を少しでも広げることができるか，また私の作品がどれだけ観者に対して意外性を示し，そこから発見する喜びを示し得るのか。等々，作品制作と発表は一体となって今，生きている自分を最大限に生かす方法と考えています。

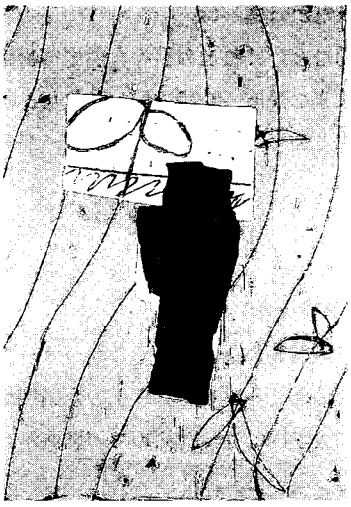

図10　川邉　耕一

北山　善夫

1．その他Ａ～Ｅ以外の場所での展示

現在はすべて同等と考えている。

2．ベニスビエンナーレ　バビリオの壁面での展示

妻有トリエンナーレ　廃校を利用して内と外に展示

3．主に絵画は壁面，見る人に対して接近して見えるように。（文字なども読んでもらう）

インスタレーションなど，その場所性を考えるため

4．様々な人々

5．20年弱前に米国，ワシントンDCの美術館で見た，まだイリヤ・カバコフを知らなかった時，その後カバコフを知った。インスタレーションで，ソビエトの社会性を表していた。天井に穴があいていて，男がある日脱出した様子を表したものであった。

6．私の世界を見たい。まだ見えていないものがあり，それは何か。

江上　計太

1．美術館等の企画展→その他→個展

その他…コラボレーション展

2．「UTOPIAN　MELANCHOLIA」

2002年　福岡市美術館

デューラーの有名な銅版画「メランコリアⅠ」をモチーフにインスタレーションに変換，パロディー化したもの。

3．インスタレーション

1983年頃福岡に来た川俣正氏のインスタレーション作品に出会ったのが一つのきっかけでした。

4．10代後半から20代前半の若者。これまでの作品を見続けてくれている人。

5．北九州市立美術館で見たドナルドジャッド展

会場空間ととてもマッチしていたから。

6．特にありません。

とにかく自分にとって面白いと感じられる作品を見たいがために発表を続けているのだと思います。

小本　章

1．美術館等の企画展→個展→その他

その他…インターネット

2．岐阜県美術館主催個展（1998）インスタレーションと平面表現

3．カラー写真を利用した平面作品：海外での発表に便利，あるいはインスタレーション

4．ひとりでも多く。

5．1999年頃？　ポンピドゥーセンターにて。

ヨゼフ・ヴォイス展　量，質共に過去最高と思う。

6．いくらでも作品が面白いようにできるから。ほとんど未発表です。

白髪　一雄

1．個展→美術館等の企画展→グループ展

2．2001アクションペインター白髪一雄展（兵庫県立近代美術館6月～7月）

会場では特設のアトリエを作り，300号の作品をフットペインティングで制作，そのまま会期中展示した。

作品「兵庫」

3．油彩画（絵の具の流動感）

4．男女を問わず全年齢層

5．日本国際美術展（毎日新聞社主催）

第何回か忘れたが，ポロック等のアメリカ抽象表現主義，フランス，イタリアのアンフォルメルの大家の作品が並んだ。

6．出品をこわれれば出品する。主催者の熱意に出来るだけ応えたい。但しイデオロギーや政治団体の主催の展覧会は出品しない。

具体的な目的はない。（この年齢になってそんなことは考えていない）

戸谷　成雄

1．個展→グループ展→美術館等の企画展

2．1988「ヴェネチアビエンナーレ」，イタリア

1990「プライマルスピリット」，日本，アメリカ，カナダ巡回

1995　個展「視線の森」広島市現代美術館

2003　個展「森の襞の行方」愛知県立美術館

3．彫刻，インスタレーション（木，石膏，ブロンズ，紙，ワックス，灰，等）

現実的（リアル）な物質だから。歴史的な形式，意味との差異が見えやすいから。

4．すべての人々。世界に怒りと悲しみを感じている人。

5．「オープン・マインド」ヤンフート企画，ゲント現代美術館，ベルギー

過去の名作，現代作家の作品，精神障害者の作品が一堂に混在。

解釈を観者にゆだねる。

6．生きるため。（精神的，経済的）

中川　るな

1．個展→美術館等の企画展→（以下は場所と機会あればいずこでも）

2．個展の他，サントリー美術館大賞展…半透明の作品を後ろからライティングしたかったが，設備が和物やケース展示だったので，大きなライトBOXを自作した。吊るのも，柱や天井がひのきなどのよい木を使ってあって，クギ禁止だったので，すき間に見えないよう元大工さんに手伝ってもらい打ったりした。

フィリップモリスアートアワード…金の床面を作りたかったので，土台を会場の床から15cm位上げて作り，その上に作った。

という風にインスタレーションの場合，グループ展では展示に工夫が必要で大変だったりします。一度，おまかせにして懲りたことがあるので，それ以来台とかも用意します。

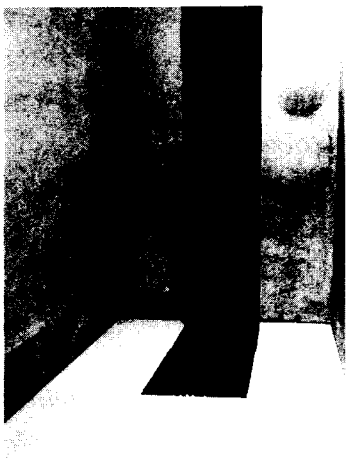

図11　中川　るな

3．インスタレーション主体。

自分の表現したい思いを（今のところ）一番的確に表せる。

4．ふだん美術にあまり関心がない人とかにふと見てもらって、"へん"とか"おもしろい"とか新しい分野への興味を持ってもらえて、Artが広がっていったら…理想です。でも現実は随分違いますが。

5．草月会館？(赤坂の)での(草間彌生展　フェラガモ展)

各フロアのつくりを生かし、作品がより生きて見える展示をしていた。でも展覧会が印象に残る理由の一番はその作品が好きということだと思いますが。

6．簡潔に、正直に言えば、自分のやりたい事をして（それでお金が入って）生活していける、ということ。

中林　忠良

1．美術館等の企画展→個展→グループ展

2．池田20世紀美術館（中林忠良・腐蝕銅版画―白と黒の世界、1997）

本間美術館（中林忠良銅版画展、1998）

初期（学生時代）から至る、銅版画行の全貌を展覧、銅版画に対する姿勢を示した。

3．銅版画。

その表現媒体を選んだ理由――愚問。自分に最も適した媒体―当たりまえのこと。

4．これも愚問。作家は発表に際して自己を観てもらうため、作家からどのような人に観てもらえるか選べる立場にない。

5．作家は一鑑賞者にはもどれない。学生時代はまだしも、作家として生き始めてからは展覧会については感動もし、批判もし、常に中立的立場から観ようとつとめて来た。印象に残るものは数知れないが、一つだけ挙げるとすれば、野見山暁治（国立近代美術館'03）絵画きの全身が画面からうかがえた。

6．これまでの仕事を踏み台として、次のステップを考える機会とする。

野沢　二郎

1．個展→美術館等の企画展→グループ展

2．第8回バングラデシュ・アジア・美術ビエンナーレ

出品作品10点中、最大のものは280×560cm。空輸のため、4分割。現地でボルト止め。

展示場所の図面等、事前に入手し、必要な金具を用意した。現地の大学生の協力で3日間で展示完了。

3．油彩

画面上で絵の具を移動させることの多い制作スタイルなので、油彩の乾燥速度が丁度いい。

4．あまり意識していない。美術関係者と一般の人、両方に見て欲しい。

5．学生時代に見た「アメリカ美術の30年」（西部美術館）1980年頃。

初めて、抽象表現主義の作品群にふれて、衝撃を受けた。自分の方向性を模索している学生時代に見る展覧会の影響は大きいと思う。

6．制作も発表も、一つには、自己の存在の確認。

その後、見た人との間で、何らかの広がりがあればよい。

図12　野沢　二郎

原仲　裕三

1．個展→美術館等の企画展→その他

その他…作家の居住する地域の特性・特質に合わせた、自主またはキュレーターが企画する展覧会

2．1998年「加害／被害」展：板橋区立美術館の入口の本物のコーヒーの自動販売機と並べて自作の自販機が展示された。

2000年「公募広島の美術」展：大賞受賞作品として会場入口の展示室の中央に展示された。

2000～2001年へ渡る1ヶ月間　個展：ヒロシマ時刻作品を被爆建物である広島大学旧理学部1号館の正面に展示した。

1997年個展：ギャラリーMOCA（名古屋）ギャラリーをコンビニエンスストアのようにした。

1995年個展：奈義町現代美術館町民ギャラリー　自販機作品を5台インスタレーションした。

3．インスタレーション：僕が目指している表現したいものは、色や形や美しさやそのほかの人の五感に訴えるも

のではなく，自然とどのように折り合いをつけたらいいのか，というような問いを発することなので，実際に体験できるような表現をしようと思っているから。

4．特に鑑賞してもらいたいというようなことではなく，できる限り多くの人に見てもらいたいです。

5．ブルース・ナウマン個展（ロンドン・ヘイワードギャラリー）インスタレーション，ビデオ

ドナルド・ジャッド個展（ハノーバー・シュプレンゲルミュージアム）平面，立体

桑山忠明個展（川村記念美術館＋千葉市立美術館）インスタレーション

菅井 汲個展（ヒロシマ県立美術館）ポルシェ・平面

ドクメンタIX，X

チューリッヒ市立美術館の常設展示

雪村展（山口県立美術館）水墨画

どの展示も作家の表現したいことが鑑賞者に伝わるような展示だったから。

6．私が制作した作品から，「自然とどのように折り合いをつけて生きていくべきか」を考えてもらいたいと思っています。

宮島　達男

1．美術館等の企画展→その他→個展

その他…特定の場所での発表（その場に合う品）を制作して発表する。サイトスペシフィックワーク。

2．Roma 個展　Hayward Gallery 個展　など

くわしくは www. tatsuomiyajima. com のホームページを参考にして下さい。

3．インスタレーション。

伝えたいことを伝えられる形式なので。

4．およそ，作家はあらゆる人々に見てもらいたい。伝えたいと願っています。

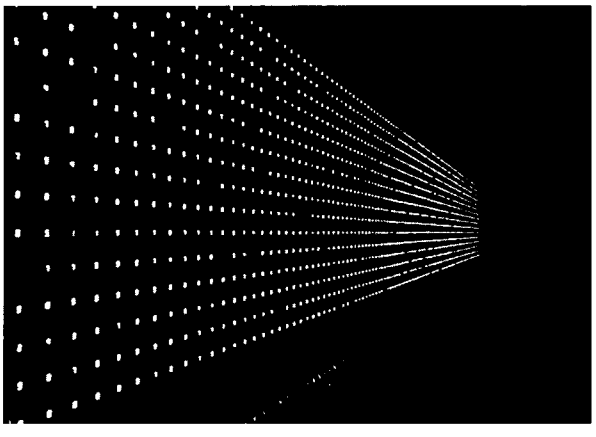

図13　宮島　達男

5．1983年東京都美術館で開催された，今日のイギリス展。

まだ学生だった頃，現代美術のインスタレーションを初めて目のあたりにし，ショックを受ける。

6．私は作品によって，人間の生命の輝きを伝えたいと願っています。

そして，人間に，希望や勇気や英知を与えられたらと考えています。

与那覇大智

1．個展→グループ展→美術館等の企画展

2．今までに行った個展は，全て重要なものです。

3．油彩画：絵の具の粘性や感想速度が自分に合っているから。

4．全ての年齢層，多くの分野の方。限られた人達にしか見てもらえない現状を目の当たりにするにつけ，そう思う。

5．1987年か88年にあった原雅幸展。写真絵画ですが，強い衝撃を受けました。

6．昨日よりよい作品をつくるのが今日の仕事。今日よりよい作品をつくるのが明日の目標。

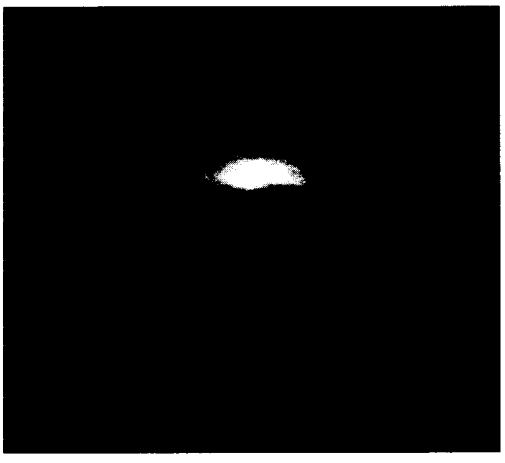

図14　与那覇大智

艾沢　詳子

1．その他→美術館等の企画展→個展

その他…特別な場との出会いが発表の現場となる。

2．芸術の森インスタレーション＃6　有島武郎旧邸

＜夏のオライオン— from part of Earth ＞

チラシ同封。若い時に読んだ有島文学。ほとんど忘れていた本をもう一度読む事によって，今の自分は，少し批評できる様な。彼が住んでいた気配と向き合って，作品をそれぞれの室に展示しました。

3．版画（主にコラグラフ），ドローイング，インスタレーションなど。

平面とか立体という概念を超え，日々の行為の集積が表現しやすい。表現媒体が変わっても，上記のコンセプトで必然的にチョイスしています。

4．作品からおのずと見る方が限られてくると思いますが，発表の場もそれを限定してしまうので，パブリックな場でなるべく多くの人の目に触れる機会を持ちたいと思っています。今やっている有島旧邸は多くの一般市民が訪れるのもあって，作品を理解するというよりも，今まで見た事の無いと言う驚きの声に，私は感動です。

5．川村記念美術館のマーク・ロスコの室に入った時，作者がまるでそこに居るかの様な気配と，作品の中に入って行く感覚に驚いた。頭で考えると言うより，体に感じる作品だと思った。

ジョナサン・ボロフスキー展（都美術館），マグダレーナ・アバカノビッチ展（'91セゾン美術館）その時まで持っていたアートの在り方が，より身近に思える様になった。

6．制作方法は先にコンセプトありきではないので，今日までの生き方（発表）を超して，生まれて来る出会いが私を“どこ”につれていくのか？　と，制作，発表することが，結果として，目的を顕在化させてくれると思います。

図15　艾沢　詳子

2，アンケートの回答を通して

本アンケートに回答された作家は皆，自身の制作活動にこだわりを持ち，いかに鑑賞者に作家の思いや世界を伝えられるかを考えて，作品発表の方法を工夫している。作品制作に使用する素材や作品発表の場所，展示の仕方などにも，作家それぞれの個性や特徴が見て取れた。

作家の回答を読んでいく中で，制作することや発表活動を行うこと，展示場所，鑑賞者とのかかわりなどについて，多くの考え方があることがわかる。

例えば虹色の作品（図6）で知られる鬚嘔は，理想の発表方法というものが特に決まっているわけではない。「(その時々の）作品によってそれが一番よいと思われる方法・場所」を選んで発表することが，鬚嘔氏の発表に対する考え方であり，その時々の作品によって，それが1番よいと思えるなら，彼は「屋外でも，廃屋でも」作品を展示すると答えている。問いの回答から，「制作」や「発表」を単なる一行為として考えるのではなく，もはやそれらは「生きること」それ自体として伝わってくる。鬚嘔の言葉からはまた，「制作」と「展示」を別のものとして捉えるのではなく，作品との対話の中から，それに見合う展示方法を導き出すことが読み取れる。

展示場所の問題に関して，「公募展とコンクールでの作品発表は今のところありえない」と語る青木野枝の言葉には，どのような思いが込められているのか。一般的に公募展は，あらかじめ制作された作品を搬入し，審査の目を通して入選が確定し，他者の作品と並べて展示されるものである。青木の望む表現は，鉄を使って即興的に特定の場に設置された巨大な彫刻であり，公募展の発表の場に合わない。

川邉耕一もまた，展示場所の広さと作品の大きさとの関係について述べている。屋内で作品を展示する場合，既に作られた建物（展示空間）を利用する。そこでは作家は，部屋の広さや天井の高さなど，既存の条件を踏まえた上で，そこに合うように作品を展示しなければならない。作品の大きさや数は，スペースに見合ったものを考えることも必要である。川邉のように，展示空間の限られた条件をネガティブに受け取るのではなく，むしろ作品が互いに良い方向に作用し合い，より引き立つように工夫することも，発表活動をする上で重要な要素と言える。

宮島達男は，とりわけ展示空間と密接なかかわりを必要とする作品を制作している。宮島は自身の作品を「サイトスペシフィック（特定の場所）」の展示であり，その場所に作品があって初めて作品としての意味を持つと考えていた。「作品」と「展示」は切り離すことのできない，一続きのものとして捉えていることが理解される。

おわりに

「スタジオからギャラリーという特別な環境に移動するだけで，生活の中にまったく露出されていな

いこと。ギャラリーがアートを展示する唯一の環境になるというのは残念なことだ。だから初期の頃から、私は自身の作品を、丘とか道の脇とか海とか古い建物の中とか生活の一部として展示してきた。美術館に展示されたから素晴らしいアーチストであるという価値観には初期からあまり興味がなかった。それがアーチストになる唯一の方法ではない。我々の生きている時代のアートというのは我々の生きている時代を表現することに失敗していると思う。今を生きる人々が分かち合える、共同の経験、表現になっていないから。」（アントニー・ゴームリー）

主に「福島現代美術ビエンナーレ」に参加した美術家に対する質問紙の調査を通して、制作と発表の密接なつながりについて本稿では提示した。アンケートを通じて、「制作」と「発表」は別個のものではなく、互いに作用し合い、補完し合う関係にあることが理解された。自身の表現したいことを形にするために、制作に時間をかけるのと同様に、作品が出来上がった後、いかに見せるか、という「発表」の問題にも同じくらいの比重を置くことが、大変意義を持っていることが示された。そのことは、作品を発表する目的について、美術家の多くが、社会との何らかの繋がりを持つ接点として捉えていたことからも理解されよう。しかしながら現在の日本の展覧会や「現代美術」を取り巻く状況は、この「関係性」において、取り組むべき大きな課題が多く残されている。

「発表」は、その動機や目的、方法などによって多種多様である。どのような展覧会にも言えることだが、発表活動は多くの人とのコミュニケーションが存在することではないだろうか。作品制作し、それを発表する時には、必ずそこに発表する対象＝鑑賞者もまた存在する。そしてその鑑賞者といかに関係するか、そのコミュニケーションの在り方を探るために重要な役割を担うのが、「展示」の方法とも言えるであろう。作家は、自身の作品に想いを込めて、それを鑑賞者に対して最大限に伝達できる発表形式や展示方法を模索してきた。つまり発表は、作家と制作をつなぎ、また制作された作品と鑑賞者をつなぐ役割を果たしているのである。

教育現場において美術はこれまで、制作に専念し、自身と向き合う時間は多くある一方で、人と作品、人と人との交流や、作品を媒介した自分や他者の想いやメッセージを通じて、多様な交流をはかる機会が少なかったのが現況であろう。また、作家や美術館等で作品に直接触れ、美術家とのワークショップ等で交流する機会は、様々な視野を与えてくれる。作品を発表し、周りからの意見を得ることや、客観的に自身の作品を眺めることは、結果として自分の成長のための貴重な糧となるものでもあろう。また作品の発表を通して、社会に対し問題提起をすることは、単に作品を“見る”ことではなく、“共に考える”ことでもある。

作品の「発表」を考察していくことは、人間と人間との交流の在り方を見直すことにつながる。その交流を実りあるものにしていくために、「発表」の可能性を探ることが、今後とも生涯学習や学校教育においても重要な課題となるであろう。

【註】

1）神野真吾『「美術」と「美術教育」の距離－近代以降の展開を辿って－』美術教育学27号、2006年、p.213

2）渡邊晃一・廣川　豪『現代美術における「制作」と「発表」との関わりについて～「制作学」を基点にした絵画研究室による地域発信の展覧会から～』福島大学生涯学習教育センター年報第10巻、2005年3月、pp. 69－77

3）「ビエンナーレ（Biennale）」とは二年に一度開催される展覧会という意味であり、福島現代美術ビエンナーレは、今回その第二回目となる。ビエンナーレと呼ばれる展覧会で有名なものと言えば、イタリアのベネチアビエンナーレや韓国の光州ビエンナーレであろう。日本では2003年に京都ビエンナーレが行われている。

4）2004年に廣川が修士論文に関連して実施したものである。以下の主な回答者から返送された。（五十音順、敬称略）

霞嘔、相笠昌義、青木野枝、新井知生、荒井経、井坂健一郎、石田泰道、泉谷淑夫、江上計太、大山美信、加藤修、金森良泰、川邉耕一、北山善夫、黒木重雄、小澤基弘、小本章、佐藤正、柴川俊之、白髪一雄、高橋克之、高山登、田中宏明、椿昇、戸谷成雄、中川るな、中林忠良、野沢二郎、原仲裕三、仏山輝美、間島領一、毛利裕就、吉岡正人、与那覇大智、艾沢詳子、松宮喜代勝、宮島達男